



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語母語話者の独話に現れる接続詞「で」について
Author(s)	石島, 満沙子; 中川, 道子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 8, 46-61
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45646
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC008_004.pdf



日本語母語話者の独話に現れる接続詞「で」について

石 島 満沙子・中 川 道 子

要 旨

本研究では理系学会口頭発表の書き起こしコーパスを用いて、日本語母語話者が学会発表の独話の中で接続詞「それで」の短縮形とされてきた「で」をどのように使用しているかを分析し、「それで」との比較を通してその意味・機能を検討してみた。その結果、次のことが明らかになった。①「で」は「それで」より多用されていた。②「で」は多様な意味・機能を持つ接続詞として用いられていた。辞書等に記載されている「それで」の意味・機能である「順接」、「添加」に加えて、「同列」、「補足」、「転換」、「対比」の6種類があった。③この他に「で」には語調を整える機能を持つことも示唆された。④「で」は口頭発表において実験方法や実験結果等の説明部分に多く使用されていた。

以上のことから、接続詞「で」の指導は学習者が産出する口頭表現、特に学会発表などの独話での「自然な日本語」の習得に繋がると思われる。

〔キーワード〕 接続詞、「それで」、「で」、接続表現の二重使用、理系学会発表

1. はじめに

日本語母語話者が学会発表や講演会等の独話で使用する接続詞の中に「で」がある。「で」は砂川他(1998:238)によると「接続詞『それで』が短くつまったもので、普通話し言葉で用いられる」とあり、その他新村編(1998)などの国語辞典においても同様の記載がある。ここでは、実際に日本語母語話者が独話(学会発表)においてどのような意味で「で」を使用しているのか、「で」が辞書および参考書上の「それで」と同一のものなのかを調べてみる。そこで本研究では、まず「接続詞」についてその特徴を概観し、日本語学習者が日本語を産出する上で起こる「接続詞」の問題点を指摘する。次に学会講演書き起こしテキストを用いて、日本語母

語話者が学会で発表した独話の中から接続詞「で」と「それで」を抽出し、更に、抽出した「で」の意味・機能を比較、分析し、辞書上等で記載されている「それで」の意味・機能との差異を検討する。また、「で」の意味・機能が学会発表の談話構成とどのように関係しているかも探してみる。これらの結果から日本語学習者の口頭表現指導への示唆を考える。

2. 接続詞と日本語教育

2.1 接続詞

本節では語句と語句、文と文を繋ぎ、文章、談話を構成していく「接続詞」の特徴とその重要性について見ておきたい。

田中（1984）によると「接続詞は特に近代日本語においてその論理表現を支えるものとして著しく発達してきた品詞」であり、「その重要な特徴の1つは古来のものの多くがうけつがれ、さらに近代日本語において多様な発達を遂げたものではあるが、それは、決して、平面的ないし並立的に用いられているわけではない。古く、和文系の接続詞と漢文訓読系の接続詞の間に、差異や対立が見られたことはよく知られている。現代においても、書きことばと話しことば、口語文と文語文の間では、接続詞の様相は、かなり異なっている。さらに、同じ話しことばでも、日常会話に現れる接続詞と、講演・講義といった一対多の場面で用いられる接続詞とでは、相当の違いがみられる」と記載されている（田中1984：82）。接続詞の性格は「先行の文や語句との間に、一定の関係づけを構成し、その関係づけのもとに、後続の語句や文を限定するところに、接続詞の特徴があるということになろう。」とし、その形態は「接続表現は、一般に、形の上から、『文の接続』と『語句の接続』に分けられる。そして『文の接続』は、指示語による場合は別として、もっぱら接続詞によって表されるとされている。」と記載されている（田中1984：84-85、88）。

以上、接続詞は文を論理的に構成し、展開していく上で重要な役割を担っているということができ、その習得は日本語学習者にとって必要な学習項目の一つであると考えられる。

2.2 接続詞と日本語学習者

先行研究では、日本語習得における「接続詞」および「接続表現」の不適切な使用に関する次のような報告がある。

田代（1995）は中上級日本語学習者の文章表現の問題点を解明し、学習者が産出した文章の不適切な接続助詞類（接続助詞に属する語と接続詞的機能を持つ語句、「連用接続」「体言止め」を含めたもの）の使用は、不自然な日本語に繋がる一要因であると指摘している。また、小池（2002）は日本語学習者と日本語母語話者の会話を録画し、その会話ビデオを見ながら、それぞれが別々に調査者とのインタビューのなかで自由に評価するという調査報告をした。その中で「円滑なコミュニケーションの遂行という視点で、接続詞や接続助詞の非用、また話題の発展など学習者が認識しにくい談話構成に関する要素を学習者に認識させる必要がある。」と述べている。

3. 「で」の分析

3.1 分析に用いた資料

本研究の分析資料として、前川喜久雄他（2001）『日本語話し言葉コーパス（モニター版2001）』（以下、『モニター版2001』とする）を用いた。これは科学技術振興調整費開放的融合研究費の交付を受けて国立国語研究所と通信総合研究所と東京工業大学の三者が共同で開発を進めている日本語自発音声の音声言語コーパスである。これの付加情報としての全音声の書き起こしテキストを使用した。

3.2 分析方法

『モニター版2001』の理系学会発表（平均発表時間約12分）の書き起こしテキストから無作為に14編を選び、「で」の抽出を試みた。その結果、14編中10編に「で」の使用が見られ、その10編について、以下のような手順で分析を行った。

- (1)10編中で使用された「で」および「それで」を抽出する。
- (2)使用された全ての「で」の意味・機能を調べる。
- (3)10編のテキストの談話構成を調べる。
- (4)談話構成内の「で」の使用数を調べ、談話構成と「で」の関係を調べる。

なお、「で」の使用がなかった4編には「それで」の使用も認められなかった。

4. 分析結果

4.1 「で」と「それで」の出現数

「で」の使用が認められた10編から「で」および「それで」を抽出し、その使用数を個人ごとに示したもの（P1～P10）が表1である。

表1 「それで」と「で」の使用数

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	総数
それで	6	0	1	0	0	0	0	0	1	1	9
で	20	13	45	28	30	12	10	3	4	11	176

「それで」と「で」の総数を比べたところ、「それで」は9と少なく、「で」は176とその使用数に極めて大きい差が見られた。対象者10名全員が「で」を使用しているのに対し、6名が「それで」を使用していないことから、日本語母語話者は学会発表において「それで」より「で」を多用していることが分かる。しかし、「で」の使用頻度は最も多いP3の45回から最も少ないP8の3回までと個人差が見られた。

そこで「それで」と「で」のそれぞれの意味・機能を比較してみる。

4.2 「それで」の意味・機能

「それで」の意味・機能について辞書および参考資料でどのように記述されているかを見してみる。

新村編（1998）：①それだから、そういうわけで、②そのようにして、そして。

小川他編（1988：364）：「それで」、「で」は前の文の内容を認めたうえでそこから次に述べるべき事柄を展開させるときに用いる接続詞。

（中略）前の話を了解したうえで次の事柄へと移る発想は、自然、前の部分を後の事柄の成り立つきっかけや要因としてとらえる発想となっている。

横林・下村（1988：27-28）：㊸前の事柄が理由でこうなってしまったという事態を客観的に述べる。「ので」と同じ、㊹「その結果は（どうなりましたか）」、「それから（どうですか）」というふうに相手の話を次から次へと聞き出すときに使う。

林他編（1990：419-420）：順接に属する語であるが、後件に意志、依頼、判断などをとることができない。並立に近い累加も表す。相手の

発言に対し、さらなる発言をもとめる機能を持つ。(筆者ら要約)

上記の辞書および参考書に記載されている「それで」の意味・機能は以下の三つにまとめられよう。しかし、今回の分析対象は独話であることから(3)の用法は含まず、独話においては(1)順接、(2)累加の2つと考えられる。

(1)順接：前文を後文の原因と認める用法

(2)累加：前文に更なる状況を加える用法

[(3)相手の発言に対し更なる発言を求める用法]

4.3 「で」の意味・機能

10編の対象資料に現れた176回の「で」について前文と後文との接続関係からどのような意味・機能で使われているかを分析した。

本稿では「で」の意味・機能を分析するに当たって、広く用いられている市川(1978)の接続詞の類別に従って行った。市川(1978:65-66)は接続詞を前後の意味関係のうえから以下の3類7種に類別している。

(1)二つの事柄を論理的に結びつけて述べるのに用いる。

(ア) 順接—前の内容を条件とするその帰結を導く。

だから、それで、すると、こうしてなど。

(イ) 逆説—前の内容に反する内容を導く。

しかし、けれども、それなのに、ところがなど

(2)二つ(以上)の事柄を別々に述べるのに用いる。

(ウ) 添加—前の内容に付け加わる内容を導く。

そして、つぎに、その上、またなど。

(エ) 対比—前の内容に対して対比的な内容を導く。

というより、一方、あるいはなど。

(オ) 転換—前の内容から転じて、別個の内容を導く。

ところで、さて、それでは、ともあれなど。

(3)一つの事柄に関して拡充して述べるのに用いる。

(カ) 同列—前の内容と同等とみなされる内容を導く。

すなわち、つまり、要するになど。

(キ) 補足—前の内容を補足する内容を導く。

なぜなら、ただし、ちなみになど。

分析の結果、表2に示すように、接続詞「で」には上記の類別の7種のなかの「逆接」以外の機能が全て認められた。

表2 10編中の「で」の機能別数

添	加	148
順	接	13
同	列	11
補	足	2
転	換	1
対	比	1
逆	接	0
合	計	176

それらの実際例を下記に示す。

(1) 順接

例1) このことから考えますと音声の知覚におきましては人間はゼロ位相を不自然だと感じそれに対しまして非零位相であれば自然であると感じてゐるのではないかと推測できます。で、我々はこのようにこと調べるために聴覚がどの程度までをゼロ位相であると判断してゐるかっていうことを調査しました。

例2) 特定の帯域のみで群遅延が値を持つような刺激を用いて主観評価を実施しました。で、ゼロ位相と非ゼロ位相の刺激音の類似度が低いということが分かりました。

上記の例文1)、2)の「で」はいずれも前の文の内容を確認して、それに対してその結果どうなったか、どうしたかという結果の状況を後文で述べていて、「順接」の機能を持つ。例1)は前文の結果、後文で新たな状況を生み出すという点で「そこで」に置き換えが可能である。例2)は後文が前文の実験による直接の結果を表すので「その結果」や「それで」に置き換えられる。

(2) 添加

例3) その側面にはビニールシートを張ってビデオカメラで観測できるようにしております。で、コウモリをこのトンネル内で飛行させ、観測いたしました。

例4) とにかく正しい時と間違つてゐる時では何か振る舞いに違いが傾向の違いがありますのでそれを使えば検出して、で、更にその検出した結果を使ってより正しい内容を理解していくような対話の運営ができるのではないかという風に考えております。

例3)、4) はいずれも前文の行為が完了した後、後文の行為が行われる場合で、ここでの「で」は「そして」や「それから」に置き換えが可能である。

(1)順接と(2)添加の機能は接続詞「それで」の機能として辞書等に記載されている。

(3) 同列

例5) ～こういったような画面で検出ができていたことを覚えていらっしゃるかと思います。で、このように有声休止の区間というものがこういうリアルタイムに画面上で検出されていくというそういったものです。

例5) は前文の内容を後文で具体的に言い換えて、説明しており、「すなわち」や「つまり」に置き換えられる。

(4) 補足

例6) クラスター数は2、4、6、11で認識に用いたのは単語トライグラムです。で、ここには書いてありませんが評価文は50文用いております。

例6) は前文で言及していなかった情報について後文で補って述べている。ここでの「で」は「ちなみに」や「なお」に置き換えられる。

(5) 転換

例7) (前略) 条件一、三を満たす解を探します。で、それがまた、それもなかった場合にはしょうがないので、ですね、全体の学習データーから学習した認識結果のS0というのを認識結果にします。これはちょっと保険を掛けてるような形になっております。で、さて実験ですがここでは通信に関するカスタマーケアサービスというタスクで学習に使ったデーターはですね、ターゲットトピックが約十七万単語で類似タスクとしてはその約四倍程度のデーターを加えて学習いたしました。

例7) の「で」は前文の内容から転じて新しい話題を導いている。つまり、前文までの内容は実験のデータ処理について詳細に述べているが、「で」によって実際の実験を新たな話題として提供されている。この「で」は「では」に置き換え可能と考えられるが、「で」がより自然であろう。

(6) 対比

例8) つまり英語では分節的特徴に比べてアクセントストレスパター

ンですがストレスパターンの語彙語義活性化への関与が小さいという結論が出ています。で、日本語のピッチアクセントは単語認知においてしかしながら英語に比べては語義活性化に大きく関与してるという報告がされています。

例8) 前文の内容に対して後文は対照的な対立の内容を述べている。置き換え可能な接続表現としては「一方」や「それに対して」等が挙げられる。

(3)同列、(4)補足、(5)転換、(6)対比の機能は4.2で表した参考書等の「それで」にはない機能である。

表2から分かるように資料に現れた176の内、「添加」の機能が148と非常に大きい値を示していた。数の多い順から次いで「順接」が13、「同列」が11、「補足」が2、「転換」が1、「対比」が1であった。

接続詞「で」は「それで」の短縮形とされているが、以上の結果、参考書等の「それで」の機能が「順接」と「添加」の二つに対して、「で」には更に「同列」、「補足」、「転換」、「対比」の機能を持ち、その多様性が明らかになった。この多様性が「で」の使用頻度を高める一因と考えられるのではないだろうか。

5. 「で」と接続表現の二重使用

今回「で」の分析を行った結果、対象資料において「で」と他の接続表現が重ねて使用されている例がいくつか見られた。接続詞は単独で用いられったり、複数の接続表現が重ねて用いられったりする場合がある。市川(1978:66)も「接続詞の意味・用法とも関連する課題として、接続詞の二重使用(同種併用と異種併用)などの問題がある」と述べている。また、馬場(2003)は二重使用の分析の問題点と必要性について次のように表している。「接続詞の二重使用については、以前よりその現象は指摘され、また、分析の必要性も指摘はされていたが、未だ、詳細な記述や分析は行われていない。その理由として、まず、実例数が少ないということが挙げられる。

(中略) また、二重使用は、特に口頭表現で臨時的に冗長な表現として用いられったり、強調あるいは装飾的目的で使用されたりし、やはり文法的問題となりにくいと考えられやすかったのではなかろうか。しかし、接続詞の二重使用の分析は、各接続類型の相互関係あるいは質的相違、さらに同一類型内の各接続詞の機能の相違、さらに一つの接続詞が複数の接続類型

で使われる可能性の問題などを明らかにする手がかりになると思われる。」
(馬場2003:3)

馬場は市川(1978)の接続詞の分類に従って接続詞の二重使用の類型をまとめているが、本稿でもその類型に従って検討してみた。

馬場は副詞および指示語を含む場合は除外し、接続詞のみの二重使用を対象としているが、本稿では「で」の機能を明らかにすることを目的とするため、後続するものとして接続詞だけでなく前文と後文の関係を論理的に繋ぐ副詞および指示語を含む接続表現も分析対象とした。その結果は(1)順接型+順接型1例、(2)添加型+添加型7例、(3)添加型+順接型4例、(4)添加型+対比型1例、(5)添加型+転換型1例、(6)添加型+補足型1例、(7)転換型+転換型1例の16例であった。先行する「で」の機能としては2例を除き全てが添加型で、後続の接続表現の機能は同種の添加型が多いものの、他に順接型、対比型など様々な類型が見られた。

資料に現われた二重接続表現の実際例を示す。

(1) 順接型+順接型

つまり1ERBを超える帯域幅を持つ場合は時間的非対象生の違いの知覚が要因になると考えられます。で、このことから聴覚はいくつかの聴覚フィルターの情報を統合してるのではないかというふうに我々は考えています。

(1)は前文で得られた内容を条件にして、導いた帰結を後文で述べているので、この「で」は順接と考えられる。よって、「このことから」と併せて、順接型+順接型の同種併用といえる。

(2) 添加型+添加型

また繋ぎ語というのは有声休止の有無を問わずにこのような括弧で括るという記号の付与を行いました。で、更に今回の研究ではこれこの各記号に該当する音響的な区間をマーク付けする作業も行いました。

(3) 添加型+添加型

ここではまず言語音を用います。こちらですね。で、次に高さ強さの効果は言語音モード、非言語音モードによってどのようにことなるかを検討します。

(4) 添加型+添加型

ですから、西武まではこう行って、こう行って、こう行ってって

うのをこう自分でこう思い返しながらか発話することが多い為に言い淀みが増えたというふうに考えられます。で、またこれを先程の繋ぎ語の記号がありますのでその中と繋ぎ語内とそれ以外を別々に分析したところやはり同様な傾向が得られました。

(2)、(3)、(4)は添加型+添加型の同種併用の例である。いずれも前文の行為が完了した後、後文の行為が行われており、ここでの「で」は添加（累加）機能を持つと考えられる。二重使用の中で最も多く見られた形であり、後続する接続表現も市川の下位区分である追加、序列、並列などがあつた。

(5) 添加型+順接型

チェックをする選択の処理を加えた方法を提案致しました。で、この結果単一のトライグラムを用いたときよりも単語誤り率が低いという実験結果を得ました。

(6) 添加型+順接型

具体的にどういう風にやるかっていうとあるボキャブラリーの中で単語認識をまず一端従来のモデルを使って行います。で、そうすると各時刻の各音素のその事後確率が求まりますから、それでスペクトルにこう重み付けをして時間方向に集計して行って正規化して求めます。

(5)、(6)は添加型+順接型の異種併用である。これは添加型+添加型について多く見られた。

(7) 添加型+対比型

（前略）こちらの場合には話速が速いために有声休止の長さも全体に短い傾向があつて検出しそなってしまうと、そのために再現率が低くなって落ちていったと。で、一方反対側は話速が遅い為に全部の音韻がこう引き延ばされる傾向にあつてその為誤検出が多く適合率が極めて低いというそういった現象がありました。

(8) 添加型+転換型

（前略）間違っている時に本当に思い通りいいえだのちがいますだのっていうことを言うてくれるとはどうも限らないと言うことが分かりました。で、では間違っている時は否定表現を言わずに一体何をいうのかという勿論ごく少数黙ってる例もあるんですが普通は訂正をする訳でして（後略）。

(9) 添加型+補足型

(前略) 継続時間が長い傾向にあるということも分かりますし明らかな物は微妙な物よりもこれは当然ですが長い傾向にあるということが分布からも分かります。で、ただしこのように記号間の分布の重なりが大きいために継続時間をこの現象の識別基準として用いることはちょっと不十分であろうということもこれから分かります。

(7)は添加型+対比型、(8)は添加型+転換型、(9)添加型+補足型の異種併用で、それぞれ1例が認められた。

(10) 転換型+転換型

全体の学習データから学習した認識結果のS0というのを認識結果にします。これはちょっと保険をかけてるような形になっております。で、さて実験ですがここでは通信に関するカスタマーケアサービスというタスクで学習に使ったデータはですね、ターゲットトピックが訳17万単語で類似タスクとしてはその約四倍程度のデーターを加えて学習いたしました。

(10)は転換型+転換型の同種併用で、これも1例であった。

以上「で」が他の接続表現に先行する場合の実例を見てきた。同種併用でも異種併用でも「で」の後続に前文と後文の接続関係を論理的に示す「で」以外の接続詞や副詞などが使用されている。このことは仮に「で」が存在しなくても前文と後文の関係は明らかであり、結果的にこの二重使用が「で」の機能を弱めているといえるのではないだろうか。このような「で」は接続詞の機能と同時に発話者にとって語調を整える機能として使用されている可能性が考えられる。この機能もまた辞書等上の「それで」にはないものである。しかし、発話者の語調を整えるという機能については二重使用ではない単独の「で」との発話時間の比較も加味して検討する必要があると思われる。

6. 談話構成と「で」の使用数の関係

4.3で述べたように、対象資料の「で」の全使用数176のうち添加の機能は148と大きい値を占めていた。ここでは多用されている「添加」と他の「順接」、「同列」等の機能が学会発表の談話構成とどのような関係があるのかを探ってみる。

6.1 談話構成内の「で」の使用数

まず、「で」の出現と学会発表の談話構成との関係を調べるために、10編の談話構成を調べ、大きく下記の3つの部分に分けた。

① はじめに・前置き

ここには研究目的、先行研究、語彙説明、仮説などの発話が含まれる。

② 実験について

実験目的、語彙説明、方法・予測、グラフ説明、結果、分析、考察などの発話が含まれる。

③ まとめ

考察、まとめ、課題、今後の展望などの発話が含まれる。

次に、3つの各構成部分に使用されている「で」の数を調べた。その結果を表3に示す。

表3 各談話構成部分の「で」の使用数

	①はじめに		②実験について		③まとめ		合 計
	文の数	で	文の数	で	文の数	で	
P 1	5	1	50	19	9	0	20
P 2	4	0	39	11	7	2	13
P 3	14	10	52	34	8	1	45
P 4	9	7	18	15	6	6	28
P 5	31	17	30	12	7	1	30
P 6	15	2	35	10	21	0	12
P 7	8	1	26	9	3	0	10
P 8	10	0	65	3	9	0	3
P 9	9	1	35	3	9	0	4
P 10	19	1	37	9	8	1	11
合 計	124	40	390	125	87	11	176

表3からわかるように「実験について」の「で」の使用数は125回と非常に多く、これは総合計176回の71%に値し、使用頻度に個人差があるものの、対象者10名全員が使用している。次いで「はじめに」には40回、「まとめ」には11回使用されているが、この二つの構成部分には「で」を全く使用していない対象者がおり、この点が「実験について」と異なっている。各構成部分の「で」の平均使用頻度は「はじめに」と「実験について」では、ほぼ3文に1回であるが、「まとめ」では8文に1回と低くなっている。

しかし、「はじめに」の「で」の高頻度はP 3、P 4、P 5の3人が極めて多く使用した結果によるもので、対象者全員が使用している「実験について」の「で」の使用状況とは違うと考えられる。

6.2 談話構成と「で」の関係

表3を見ると「実験について」部分の「で」の使用数が他の「はじめに」と「まとめ」より極めて多い結果になっている。そこで「実験について」で使用された125の「で」の意味・機能を調べ、多い順に並べてみた。その結果は①添加(110)、②同列(7)、③順接(6)、④補足(1)、転換(1)の順であった。()内は使用数である。ここでは「添加」の機能の使用数が突出していた。

さらに「実験について」で各対象者が使用した「で」の意味・機能別割合を図に示す。

図1 「実験について」の各対象者の意味・機能別割合

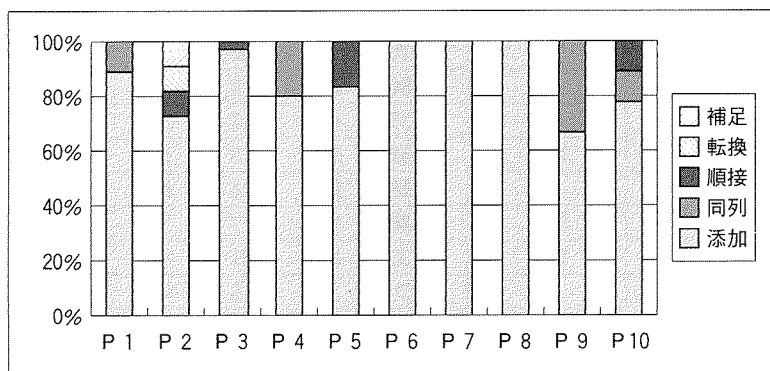


表3からは個人の「で」の使用数に顕著な差が見られたが、図1の意味・機能別割合をみると、一様に各対象者の「添加」の占める割合が大きいことがわかる。この理由として、一つは「実験について」の部分は語彙説明や実験方法、結果等の発話が主で、そのため実験手順など、前文で1つの行為が完了した後、時系列的に次の行為を加えていく「添加」が多いと考えられる。

7. まとめ

接続詞「で」は「それで」の短くつまったもので、普通話しことばで用

いられるとされていることから、「で」は「それで」と同じ意味・機能を持ち、よりくだけた表現であるとの認識がある。今回の分析対象資料である学会発表の独話における表現は日常会話ではなく、より公式的であることから、短縮形ではない「それで」の方が使用頻度が高いのではないかという予測があった。しかし、それに反し今回の研究では、対象者である日本語母語話者10名が実際の学会発表において「それで」より「で」を極めて多く使用していることが分かった。また接続詞「で」は今回の分析により、辞書等に記載されている「それで」の3つの意味・機能（順接、添加、相手の発話のうながし）をもつだけではなく、さらに4つの意味・機能（同列、補足、転換、対比）で使用されていた。同列の「つまり」、「補足」の「ちなみに」、「転換」の「さて」や「対比」の「一方」などに置き換えが可能で、「で」が全て「それで」に置き換えられるものではないことが明らかになった。「で」が「それで」より多く使用される理由としては、「で」が多様な意味・機能をもつことから発話者にとっては前文と後文を接続する上で「で」の使用を容易にし、結果的に使用頻度を高めているのではないかと推測される。

また、今回「で」を含む接続表現の二重使用を分析した結果、後続の「で」以外の接続表現が前文と後文の接続関係を明確に示している場合が多く、「で」の機能が弱まっている可能性が見られた。更なる検討は必要ではあるがこれは、発話者の語調を整えるという「で」のもう一つの機能を示唆していると考えてもいいのではないだろうか。

次に、「で」と理系学会発表の談話構成「はじめに」、「実験について」、「まとめ」との関係では、「はじめに」と「実験について」の部分で「で」が高頻度に使用されており、更に「実験について」の部分では分析対象である日本語母語話者10名全員の使用が認められた。そこでの「で」は主に「添加」の意味・機能として用いられている。その理由として、「実験について」の部分が語彙説明や実験方法、実験結果などの発話が主であることから、前文に新たな状況や事実を加える「添加」が多用されていると思われる。

2.2の「接続詞と日本語学習者」で述べたように日本語教育において学習者が産出した文章や発話の「不自然さ」の要因の一つに接続詞および接続表現の不適切さがあげられている。今回の分析の結果から、(1)接続詞「で」には6つの意味・機能があり、多様な状況で用いることが可能であ

ること、(2)理系学会発表において、語彙や実験方法などの説明部分で「で」が多用できることが明らかになり、学会発表においては「それで」より「で」の使用の有用性が窺える。これを日本語教育への還元からとらえると、接続詞「で」の指導は日本語学習者が学会発表練習で産出する接続表現の誤用、および非用の改善に役立つと思われ、「自然な日本語」の習得に繋がると考えられる。

今回は「で」の意味・機能の分析において、辞書等に記載されている「それで」の意味・機能と比較した。その結果は「で」の機能の多様性が認められ、「で」が単に「それで」の短縮形であるとは言えないことを示していた。しかし、「それで」にも辞書等に記載されている以外の意味・機能を持つ可能性があり、詳細に分析してみる必要があるだろう。それは今後の課題としたい。

参考文献：

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 小川芳男・林大・他編集 (1988) 『日本語教育事典』 大修館書店
- 小池真理 (2002) 「会話に参加した日本語母語話者と学習者の評価のずれ」
AILA 2002 Singapore, 13th World Congress of Applied Linguistics 資料
- 砂川有里子他 (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点－不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる－」 『日本語教育』 85号 pp.25-37
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題－その成立と機能－」、鈴木一彦・林巨樹編 『研究資料日本文法第4巻』 明治書院
- 新村出編 (1998) 『広辞苑』 岩波書店
- 林大編集代表 (1990) 『日本語教育ハンドブック』 大修館書店
- 馬場俊臣 (2003) 「接続詞の二重使用の分析－用例と各接続類型の特徴」 『北海道教育大学紀要』 人文科学・社会科学編第53巻第2号 pp.1-17
- 前川喜久雄他 (2001) “開放的融合研究『話しことば工学』による『日本語話し言葉コーパス (モニター版2001)』” 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域
- 横林宙世・下村彰子 (1988) 『接続の表現』 荒竹出版

いしじま まさこ・なかがわ みちこ (留学生センター非常勤講師)

A study of the conjunction *de*

ISHIJIMA, Masako and NAKAGAWA, Michiko

The aim of this study is to clarify the usages of *de*, commonly viewed as a contracted form of the conjunction *sorede*, through the analysis of a corpus consisting of presentations at scientific meetings.

The findings were:

- (1) *de* appeared much more frequently than *sorede*.
- (2) Various usages of *de* were found. In addition to consequence, and addition, these included exemplification, supplementation, topic-change, and contrast. A further function of *de*, that of filler, is also suggested.

This wide range of use can be seen as an important factor in (1).

- (3) *de* appeared most frequently in sections of the presentation explaining methods and results of experiments.